

講じフオーゲル教授が都市發達地理を講じて居た位に過ぎませぬ、云はゞ歴史地理的研究は聊か下火になつて居ると申さねばなりませぬ、ライプチヒ大學の如きも、歴史地理の研究室は小さいながらによく整つたのを持って居ますが、今は全く放棄の姿となつて居るのを見て、其の

西遊夢錄

(十九)

瀧川規一

一般を察する事が出來ます。要するに現今は、單に古典にのみならず、地表に立脚して健全に極く科學的に研究するを目的として居ることがわかるのであります。(終)

蘇國の部

(xx) エデンバラ市及び其附近

【グレイフライヤズ墓地】 詩人アラン・ラムジューが永眠せる墓前に額づきて後有名なる犬の墓を訪ふことになつた。スヘクテータ (The Spectator) 誌上に掲載された。アトキンソン (Miss Atkinson) の物語『グレイフライヤズのホビー』 (Greyfriars' Bobbie) がこの犬を有名ならしめたのであるが、今は犬の像を戴く噴水の記念碑となり墓地の入口近くの橋の袂に賢こさうな顔を見せて居る。

千八百五十年代の頃にグレイ (Grey) と云ふ農夫がミドロシアンの田舎に住んで居つて毎週水曜日にエデンバラ市の市場に一疋のテリア種の犬を連れてやつて來た。この男はエデンバラ城頭から號砲が一時を報すると定つたやうにグレイフライヤズの墓地 (Greyfriars' Churchyard) の附近にあるツレイルの食堂 (Taille's Dining-rooms) に犬と共に姿を現はし晝食をとつた。犬は蘇國の習慣としてパン (Dun) と稱せらるゝ甘パンと時には御馳走として肉附の骨を頂戴した。一八五八年に主人のグレイが死んでこの墓域内に葬られた。葬式の三日後一疋の犬が悲しさうな空腹な様子なして食堂に姿を見せ食堂の主人の顔を見上げながら物乞ふ有様であつた。

よく見ればいつも飼主グレイと共に来るホビ (Booby) であることに気がつき餘りに可哀相な心地がしたので甘パンを呉れてやつた。犬はそれを喰はず口に咬へて店を飛び出した。翌日同じ時刻になると犬はまた姿をあらはした。食餌を貰ふとまた一目散にそれを口に咬へて飛び出して行く。三日目になると案の定犬がやつて来る。主人は興味と好奇心とに驅られ犬の行衛をつきとめんとその後をつけた。すると犬は甘パンを口に咬へてグレイフライヤズの墓地に走り主人の墓の傍に坐つて貰つたものを食へはじめた。

探索の結果ホビは主人の葬式の日には葬列の後に随つて主人の墳墓に至り野邊送りの人々が去つた後も其處を立ち去ることを肯じなかつた。飢を覚えるに至つてはじめて其處を退いたのである。この話を聞き傳へてグレイの故家に住んでゐる者がホビを飼はんと三度試みたが、其都度犬は逃げて墓地に走つて來た。ホビは日夜墓地に過し風雨の夜などは兩宿りの出来る墓石の陰に隠れて雨露を浚いだ。同情して飼つてやらうと附近の人がホビを手撫づけんとして頑強に抵抗しても應じない。そのうちに同情者の好意によつて主人の墓側に小屋が出来た相も變らず定刻になると寸分の遅刻もなく犬は食堂に姿を現はし食物を乞ふた。斯の如くにして九ヶ年の月日が経つた。その時に犬の飼養規則が出来て飼養鑑札を受けるには年額三圓五十錢を納めなければならなくなつた。ホビはその規則に觸れて『野犬』(Vagrant dog) として捕縛され犬の法廷に拉し去られた。捕縛の際様子を居た

食堂の主人は同情の餘出來得ることなら救つてやりたいと思つたので犬に随つて法廷に出頭した。法官は無宿の犬を隠匿した罪で一旦は食堂の主人を叱りつけたが今までの一部始終を審に聞いてこの犬に限つて無税にて養ふことを許した。斯くてホビは撲殺を免れたのであつた。

この哀な犬は不思議にも長命を保ち一八七二年まで生存して居つた。死んだ時には主人と同じくグレイフライヤズの墓地に葬られた。その墓地には薔薇が生え茂り墓守は訪問者に常に花を指し示したと云はれて居る。ホビが死ぬ少し以前にパーテット・ターツ (Baroness Burdett-Coutts) と云ふ男爵夫人がこの墓地に來た時ホビが相變らず主人の墓側に侍つて居るのを見て感心した。ホビ君が逝去するや男爵夫人は官憲の許可を得て墓地の門口近くの往來の隅に花崗岩の噴水を作りその上に犬の像を冠せたる記念塔を建てた。これが犬の話である。余が往訪の時には墓守によつて教へられた犬の墓地には薔薇の花ならで他の草花が畝をなして咲揃つてゐた。

【ホーンデン邸宅】ドラモンド・オヴ・ホーンデン (Drummond of Hawthornden) の幽邃なる屋敷を見せ、貴ぶ爲めに早朝からエ市の停車場に行く。汽車にて半時間ばかりの距離である。エラモンド (William Drummond of Hawthornden) は今日世に殆ど忘れられんとし居る。十七世紀前半の詩人であるキラ・カウチ (A. T. Quiller-Couch) の編した『牛津英詩選』(The Oxford Book of English Verse) 及びリワード (T. H. Widd) の『英詩人』(The English

Poets)には偵にドラモンドの詩を逸して居ない。詩人は一生陰鬱な生活を送り何とはなしに隱遁者の感じのする性質の人であつた。二十五歳の時に父を失ふまでは佛國にあつて法律を學び、父の死と共に歸國したが趣味に任せて文學書を漁り讀んだ。自然その藏書も拉典希臘伯萊伊太利西班牙佛蘭西及び英語の諸語に亘つて居り全部が今日エザンバラ大學の圖書館に收藏されて居る。エスタク河(The Esk)畔の美しき屋敷と書籍と思索とが彼の世界を作つて居つた。彼の公にした叙情詩の大半は悲みの歌である。三十歳の時結婚せんとした美人の花嫁が結婚式の前晩に忽然と死んだ。爾來悲歎造る方もなく十七ヶ年の間獨身で押し通した。これが彼の悲歌の生れ出でた主なる理由である。妻を失つて悲傷の心をながき散文に書き立て、多くの讀者をして貰ひ泣きの涙を流さしめた記者は日本にもあつた。また物に書かなくとも美妻君を失つて悲痛の餘り半歳の長き月日を晝夜布團を被つたまゝ戸外に姿を見せなかつたと噂される學者もあつた。詩人ドラモンドが亡き妻を歎く哀歌を讀んで一掬の同情なき能はずであるがドラモンドをして歴世人の噂話の種たらしめるものは當時戯曲界に於て名聲天下に轟いて居たベン・ジョーンソン(Ben Jonson)が遙々倫敦からエザンバラに来てホーソンテン村にドラモンドを訪ひ、文藝談をなした談片録である『ベン・ジョーンソンとドラモンドとの交談録』(Ben Jonson's Conversations with Drummond of Hawthornden)は實にジョーンソンの人物の半面を傳へ、『大英人名辭典』(The Dictionary of Natio-

nal Biography)のジョーンソン傳に記載せる材料が據つてゐる唯一の典據である。

ホーソンテン驛を降りて道を右にとり半道ばかり行くと樹木鬱蒼たる庭園がある。鐵柵の門の右側には番人の家がある。依頼の聲に應じて人間にはあらで一疋の犬が飛び出して來る。凄まじく吠えつく。やがて一人の小娘が姿を現はして犬を宥める。小娘は余が來意は向ふの庭内で仕事をして居る男に許可を得よと教へて呉れる。吠ゆる犬に護衛されながら庭内深く進む。樹木の梢空高く繁り熊笹交りの下草生ひ茂る庭内に道は幾うれりを重れる。右は丘陵の裾に接し左は溪流を控えて次第下りに下り遂に懸崖に到つて止まる。京都は高尾の楓樹の谷を逍遙ふ心地がする。道の行詰らんとする少し手前に右手の丘腹から稍斜に一本の高木が見事な校葉の繁茂を頭上高く道の上に突き出して居る。この大樹こそ倫敦の酒場から御腰をあげてエザンバラ市まで全くの徒歩で、肥滿の體軀を運んで來たベン・ジョーンソンが樹下に卓子を圍んでこの館の主人と文藝放談を試みた處であると云ふ。溪流はエスタク河である。流に臨んで圓塔がある。破損して危険になつて居るので屋内縦覽を拒絶されたが、右手の懸崖にはロバートブルース(Robert Bruce)が藏書を秘藏した處であると傳へられて居る岩窟がある。案内されるまゝに岩窟内に低頭潛入する。二つの洞窟が隣接し一つは廣く一は稍狭い。洞窟の四壁には書棚の形に岩を彫りつけてある。戰爭中ブルース王が書籍を此處に收藏し散佚を防いだのであると案内の男が説明して呉れる。洞窟を前方に出づれば懸崖の中腹に自然の岩

石にて作られた出張り臺がある。淀める水の紺碧を脚下に見急かるる處々に白泡の渦を眺める。靨つて足を滑らせば忽ちに水底の藻屑とならんと思はるゝ程の高さである。對岸も亦丘陵迫つて懸崖をなして居る。左を遠く眺むれば幾曲りをなして流れ入つたエスキの河は庭内に再び一曲りをなし右手に遠く姿を樹間に没してゐる。實に幽邃の仙郷である。『詩神を鍊るに好適の靜境』であると推賞されたのは有名な話である。對岸の丘陵には樹間に人家を隱見する。ジョン・ノツクスがこの岩の出張り臺から對岸の群れ集つた人々に説教をしたが奇蹟的にその聲が對岸に届き明瞭に聽聞し得たと云ふ。當時沙翁をすら眼中に置かなかつた大戯曲家のジョンソンがこの莊園の主人に款待されて數週を過したのは今日精確なる知識を缺くが一六一八年の歳末か若くは翌年の一月であつたとされてゐる。主客兩人が交した歡談は當時の文學界その他社會的に名を成して居つた人々に關してなした偽らない批評である。沙翁のテムベストも槍玉に擧つてゐる。テムベストにはホヘミアで難船をしたことを口にする作中の人物が居る。然るにその難船の場處である海は百哩以内には無い筈だとの孔捨ひなジョンソンがやつたのはこの大楓樹 (Sycamore) の蔭である。エリザベス女皇が何故に獨身で一生を通し得たかの露骨な話を吾々が知り得るのはこの交談のお蔭である。客人のジョンソンは年の頃五十歳に近く主人のドラマモンドはそれより十歳ばかり年下である。客は得意満面の男盛りの人である。主人は自らの才智をも貶し見る謙抑の仁である。交談

録を讀んで大楓樹の朝露を旅の袖に受ける時兩人對坐の有様が眼前に彷彿として現はれる心地がする。翻つて主人のドラマモンドの生涯を想ふ時その淋しき悲しき胸の底にも悠々自適の心境がある。ドラマモンドの文筆のすまびは他の文士の如く繁劇なる社會生活の餘暇を盗んでの餘伎ではなく、また高位顯官の人々の庇護に纏る生業の苦しみでもなかつた。ドラマモンドの文伎は他人の庇護によらぬ寛裕の生活の賜物であつた樂しみの讀書に目を送り心行くまで詩想をこの閑寂の境に鍊つたのであつた。彼としては諸種の政論に筆を執つてあたら詩泉を枯渴せしめ、社會の風潮が日に日に自己の理想に反し行くことがあり、失つた妻をながく忘れ得られぬ年月はあつても、彼の閑適裕容の生活は自ら足るを彼に訓へたであらう。彼から生れた十四行詩に平靜な明淨な叙情的氣分が洋溢してゐるのは斯うした境涯の所産であらう。いつまでも低徊去るに忍びない感じのするのは自然の野趣に富んだ實にこの庭園である。

【蘇國高地の湖水巡り】小説家のステヴンソンの親の家と幼時通つてゐたと云はるゝ村の小學校を訪れたのが一日、また文豪スエットの邸宅及びその附近の地方を一巡したのが一日と云つた調子で氣永に歩き廻るうちにエザンバラ市と名残り惜き別を告げる日が來た。行方は蘇國高地の湖沼地方である。湖沼を巡るに道はカラランダ (Callander) にとるか格拉斯ゴよりするか若くはアーバフォイルよりするかは旅先の大問題である。エザンバラに來る以前に既に突入した地點もあ

る。成るべく既往の地を避けるために、道をアーバフオイル (Arbaford) にうつた。

アーバフオイルはロツホ・アード湖 (Loch Ard) の東端の一寒村である。汽車の終點ではあるが宿とては一二軒を算するものである。エ市を出てたのは午前中であつたが此處に到着すれば既に午後の四時である。宿の入口で満員空房なしの悲音を聞く。引かへすには既に汽車がなく進むには乗物なしと云はれた時は吾ながら泣面に哀を催す。女將の好意によつて只一夜丈け他の客の不在中その部屋に割込みを許さる。夕食後湖畔まで散歩に出かける。京都は山鼻の茶屋に一夜を明かした時の静寂の感を其儘味ふことの出来る山間である。川あり湖あり若し良伴を得たる閑遊ならば数日を此處に送り俗塵を避けたいと思ふ程吾が意を得たのであるが如何せん他人の部屋に割込んで居る一夜の宿かりである。

黄昏時まで周囲の風物を眺めんとて足に委せて散策する。一人の紳士が向ふから来る。五十歳をやくつ超したと覺しき頑丈な肥え氣味の人である。余を見るや否や直に足を留めお定り文句のやうに日支何れの國籍なりやと問ふ。紳士は三人の男兒がある。長男は牛津を卒業後既に世に出て、活動をしてゐる。次男は卒業したばかりで未だ就職して居ない。三男は在學中である。紳士自身も牛津の出身であるとして英人には珍らしく身柄を打明ける。日本にも大卒卒業後就職難があるか日本の教育制度の進歩を聞いてゐるが、爲めに日本特有の愛國心は減退せぬか社會の不平分子は増加せぬかなどと六

つかしい問題を矢繼ぎ早に問ひ詰める。それに巡査までがいつの程からか加つて質問の言葉を押む。この查公田舎勤めにしては日本通である。何の爲めにこんな僻地に足を踏み入れたかと問ふ。日本にはこれに似た風景の地が此處彼處にあると聞いてゐるが何の爲めにこんな僻地に足を踏み入れたかと問ふ。スコットの『湖上の美人』にこの地名に載せられて居るからだとの返答をする。それで彼は満足したかと思へばさにはあらず、それではカラダへ行くと念を押す。行けるならば行きたい。トラサツクス越えをする豫定だと答へると、是非カラダへ來よ、豫定が確かならば先方のオフイスに通知をして置くと巡査は云ふ。こんな山中で日探扱ひは些か恐縮する。ともかくも斯うした連中につき纏はれては折角の旅の興もなく。宿の床に就くに若かずと思ひ来だ全く暮れぬうちより孤獨の室に淋しく天井を眺めてゐる。

アーバフオイルの曉は夏なればこそ爽快な朝風を味ふ。一頭の馬にひかせて一人の老人が御する高車に只獨り乗せられて高度の傾斜道をうねり／＼登り行く。朝露を帯びた若緑のシダの生ひ茂る山腹を脚下に見卸し溪流の細き水音を耳にしながら馬脚を氣遣ふ。時々馬の跳ける途端に車臺から御者諸共にほり出されさうな險道である。かみ手の山腹一面を蔽ふ灌木の此處彼處に點々白く或は褐色に蠶くが如くに見ゆるは羊や山羊の飼ひ放たれて居るのである。やがて徒歩に山道を辿る二人の婦人が手に小さき書冊をもつて居るを過ぎる。婦人等は同乗を求める。キヤメラを落したのを拾ひ來たとて

走り来る數名の小僧はまたも同乗を求め。山峽に遠く見ゆる石切小屋から来た小供連れの中年の婦人も亦同乗を乞ふ。御者は一々余に許可を求め。最初買切りの筈であつた車に同乗者が増えたからである。最初の婦人等は詩の叙景の眞偽を論じてゐる。小僧等は馬脚の遅しと見れば或はとび降りたり跳び乗つたりする。ひとりゆられ行く心細さはなくなつた御者も亦不意のポケットモネの増加でほく／＼顔である。山峽の嶺を見、遠くに大小の湖面を眺める頃から道は降り坂である。右遠くに白く水面の見えるのはツナカ湖 (Tsch Venachar) であり、左に連つて小さく見ゆるはアクレイ湖 (Loch Achray) であり、左に山嶺高く岩角を見るはベン・ヤマの山 (Ben Venue) である。アクレイ湖畔に一郭の城と疊しき建物が見、如く嚴然と控えてゐる。これこそスコットが口を極めて賞め讃へてゐるソロサツクス・ホテルである。またもうれり／＼降り湖畔に近づけば一艘のボートを漕ぐ美人がある。湖上の美人のエレン (Ellen) (エカトリン湖 (Loch Kairna) の小島から一舟をもつて緑衣の騎士を迎へたのである。谷に降り樹下に車を馳せて後漸しくカトリツリ湖の舟乗り場を眺め得る丈けであつて未だ湖面にすら接しない。ソロサツクス、ホテルに到着したのは正午過ぎであり晝食をとり二泊の約束にて室を定める先刻樹間から隠見した艇上の美人はエレンの美貌の持主であらうかとホテルの庭に暫憩ひてボートの湖岸に近くを待つ。夜目遠目の幻滅を將に味はんとした時吾ながら不良老年の悲哀を感じた。室は湖に面し窓から眺める月明の山景は晝間の失望を償ひ得て餘りがある。或はホテル

の休憩室或は庭上に背の程は諸國から集る旅客の異なる訛りに興を抱いて耳を傾く。米人大多數を占めヤンキ訛りに鼻聲が耳につく。印度人あり支那人あり邦人あり同じく英語をあやつりながら母語の特徴を丸出しにしてゐる。蘇人英人と雖も夫々の方言に出身を暴露し聽覺の面白き一夜を過す。

新著紹介

○地理教材研究第十三輯

日黒書店發行 定價一圓

二十錢。

西田君の洋行中に、帷子君が代つて骨を折られた第十三輯である。佐々木清治氏の宿場町の研究といふ近來の力作が出てゐる。宿驛の歴史から近古の宿場といふものを説明し、その形態の特殊相や基本型さては市場との關係及其の没落過程が論じてある、いかにも立派なものだ。神田逸二氏の世界の地理區。柴田氏の秋田縣地理區。富田氏の斷層崖と同線崖帷子氏譯地體構造の新説。田卷氏の伊獨丁諾の衆落いづれもとり／＼に面白い。旅行記として西龜氏の北海樺太、三村氏の滿洲、杉目氏の新高山、さうした九篇合せて一五六頁菊版のさざりとした小冊子になつてゐる。(藤田)

○都市地理研究

人文地理學會編輯 刀江書院發行

定價一圓五十錢

小田内通敏君 昭和二年五月に人文地理第二卷を出した後